

鹿児島県高校生物部誌の展望

(昭和 51 年 3 月)

1976 年

鹿児島中央研究 (第 6 号) 別刷り 1976

福 田 晴 夫

鹿児島県高校生物部誌の展望

生物科教諭 福田晴夫

高校の生物部または生物クラブが発行する、いわゆる生物部誌に対する一般の認識はきわめて不十分である。それらは任意参加の生徒会関係の部であれ、正課の必修クラブであれ、単なる物好きな生徒や教師の片手間仕事のように思われがちであるし、事実そういわれても仕方のない一面をもっている。

実は、私自身高校生時代に自分でガリを切って部誌を発行し、大学生時代も同じようなことに手をそめたし、教職についてからは、加世田高校で「まのせ」の、出水高校では「しびっちょ」の創刊に力をかけた。いわばクラブ誌の中につかりこんで来たような生活であった。また一方では、この種の部誌に発表される昆虫関係のオリジナルな記録を見落さないように、できるだけ多くの部誌を手許に集めるよう心がけてきた。

それにしても、発行部数が少なく、読んでくれる人たちもごく限られ、そして泡の如く消え去るものが多い生物部誌は、高校における自然科学教育の中でどのような役割を果たしているのであろうか。また、その望ましい姿はどんなものか。さらには、これを生物教育の中心に引きずり出した教育形態はできないものか。このような問題を考えるために、まず、本県における実態を把握し、若干の問題点を提示することが本報の目的である。

現在の時点で目を通すことができた部誌は、私自身の所蔵品のほかに鹿児島昆虫同好会所蔵のものおよび出水高校生物部所蔵のものを加え、さらに一部個人の所蔵品をお貸りしたものであるが、発行されていることがわかっていながら未見の文献もある。これらについてはいずれ機会を見て補充していきたい。

本文に入るに先立ち、文献の入手閲覧についてお世話になった出水高校の木之下三夫氏、玉竜高校の前田正義氏、いろいろな御教示をえた本校の森田忠義氏らの御厚意に深謝の意を表する。

1 鹿児島県高校生物部誌の発行状況

第二次大戦中およびそれ以前の旧制中学校時代にも、例えば鹿児島商業アマチュアクラブの「趣味の博物」など注目すべきものがあるが、本報では戦後すなわち1945年以降に発行された新制高校のものに一応限定して、これらを表にまとめてみると次のようになる(第1表)。なお、近年鹿屋女子高で小冊子が発行され、ずっと以前玉竜高校生物部のB会で何か発行されたいが、今回は割愛した。

第1表：鹿児島県高校生物部誌の発行状況

創刊号の発行順(年代順)に並べ、表中の数字は部誌の号数を示す。○印は見る事ができなかったもの。1945～1949年は発行されていないので省略。

部 誌 名	高 校	1950	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76
モンシロチョウ	志 布 志	1	2	3																								
ORIENTS	大 島									1	?	?	?	4	5	6	7	8								9		
あ こ う	鶴 丸													1	2	3	4				5							
生 物 部 誌	ラ・サール													1	2	?	?	?	7									
牛 屎 院	大 口													1														
か じ の き	加 治 木													1	2	○	4	5										
ま の せ	加 世 田													1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
寒 蘭	宮 之 城													1	2	3												
BIOLOGY DATA	鹿 児 島													1	2	3												
脈	鹿 屋													○	2	3												
甲 南 生 物	甲 南																		1	○	○	○	5	6				
し び っ ち ょ	出 水																			1	2	3	4	5	6	7		
桂 木	川 辺																		1									
QUERCUS	指 宿																										1	

この表から、若干の例外を除けば、本県下の高校では1960年代に部誌の発行が集中し、1950および1970年代ではあまりみられないことがわかるが、その原因についての明快な説明を私はまだ見出しえない。

2 各部誌の内容の概観

高校生物部誌のもつ諸問題を検討するにあたっては、どこかちゃんとした機関（公立図書館、研究所など）で、すべての部誌を集積所蔵し、各誌の総目次などを作る仕事がまず必要である。しかし、今のところすぐにはできないと思われるので、とりあえずここに概略をまとめておきたい。

「モンシロチョウ」（志布志高校生物研究会）

〔創刊号〕（1950年12月26日発行）〈ガリ版刷袋とじ・19頁〉

発光細菌，プランクトン，甲虫，チョウなど生徒の実験・調査記録

〔第2号〕（1951年2月28日発行）〈ガリ版刷り・17頁〉

発光細菌，プランクトンのほか，チョウの報文が多い。

〔第3号〕（1951年8月11日発行）〈ガリ版刷・20頁，昆虫採集特集号〉

志布志地方の昆虫採集地案内，志布志地方のチョウ，高千穂蜂の採集記など。

これらは私たちが高校生時代に自分で鉄筆をにぎって作りあげたもので，いくつかのチョウ類の新記録を含むが，3号まででとどめている。というより，これが母体となって現在の鹿児島昆虫同好会誌「SATSUMA」が創刊され25年間71号まで続いていることになる。なお，志布志高校生物クラブでは1967年「枇榔島亜熱帯植物群落についての研究」（タイプ，43頁）を発行している。

「ORIENTS」（大島高校生物部）

〔創刊号〕（1959年11月21日発行）〈ガリ版刷・32頁〉

山羊島植物分類, 校内植物分類, 貝殻分類のほか体液の組成と作用, イネの一生, 沖永良部採集記など。

〔第2・3号〕

1960～1962年に発行されているが, 手許に雑誌がないので次回にゆずる。

〔第4号〕 (1963年3月20日発行) <ガリ版刷・40頁>

崎原採集記(植物), 熱帯医学研究所訪問記, ハブ生態研究所を訪問して, イワカワシジミについて, 血液型と学力, アマミセイシカとその近縁種, ほか。

〔第5号〕 (1964年2月29日発行) <ガリ版刷・50頁>

採集遠足(本茶峠), 奄美の植物, 奄美有用植物目録, 安勝山の植物など植物関係のほかハブ, メクラヘビ, 白蟻の腸などがある。

〔第6号〕 (1965年3月25日発行) <ガリ版刷・60頁>

笠利, 八津野採集会, 名瀬市内産蜘蛛類目録, 真珠の養殖, だせん染色体の観察など。

〔第7号〕 (1966年3月25日発行) <ガリ版刷・82頁>

奄美大島産コガネムシ科, 奄美のチョウ, 奄美大島産陸産蛇類, 奄美群島植物メモ, 細胞とその染色法, 名瀬港内のプランクトン, 再生実験, 血液型など。

〔第8号〕 (1968年3月1日発行) <ガリ版刷・82頁>

奄美の蝶数種について, ウニの内臓観察, ネズミの解剖, 卵かく膜による浸透作用, 貝, 闘魚(タイワンキンギョ)の生態, 奄美バナナのすべて, 奄美の野鳥紹介, 奄美諸島に生きる両生類, 大和村滝の川山林に関する報告, など。

〔第9号〕 (1973年7月発行) <タイプ印刷・26頁>

奄美の植生の特異性・奄美の自然保護への提言, 西表島の自然, 奄美の蝶, オットンガエルについて, トゲネズミとケナガネズミなど。

今日まで続いている県内部誌の中では最も古いもので, 内容はローカルカラー豊かで, 変化にとんでいる。総合雑誌的な編集といえるだろう。

「あこう」(鶴丸高校生物部)

〔創刊号〕 (1962年12月24日発行) <タイプ印刷・30頁>

心臓と搏動, ごまだらちょうの越冬幼虫の飼育, 霧島採集旅行, 熱帯魚の飼育, 桜島の植物, 血液型判定, ほか。

〔第2号〕 (1963年12月24日発行) <タイプ印刷・58頁>

佐多採集旅行の特集号として植物・昆虫・水産動物などの記録と採集記がある。串木野の海産動物物採集, 鹿児島県の多足類, ハエトリグモ, 血液型判定結果ほか。

〔第3号〕 (1964年12月24日発行) <タイプ印刷・49頁>

シロオビアゲハの観察, 佐多岬の採集記(水産・昆虫・植物グループ), 牛の眼球の解剖, イカの解剖, 文化祭の記録, 植物の有毒成分ほか。

〔第4号〕 (1965年12月24日発行) <タイプ印刷・60頁>

プランクトンの観察(蘭牟田池と旧七高池), 卵からカエルまで, 環境と動物(フナムシの体色

変化，メダカの眼球運動反応），植物間の相互影響，蝶に関する二つの失敗話，布計採集旅行記，大島・沖永良部採集記，ヒマワリ，海のネズミ（ナマコ）ほか。

〔第5号〕（1969年12月24日発行）＜タイプ印刷・34頁＞

熱帯魚の研究，発光バクテリアの培養実験，霧島採集旅行，沖縄採集から帰って，ヤクシマルリシジミの飼育，メスアカムラサキの飼育と観察，解剖雑感，微生物の培養，プランクトンの発生，水上坂植物採集記録，自然の保護を!!，ほか。

その後は発行されていないが，1～5号はいずれも生徒たちが自分の力で作りあげたという感じが強く，好感の持てる力編が多い。

〔生物部誌〕（ラ・サール学園生物部）

〔創刊号〕（1963年6月発行）＜ガリ版刷，袋とじ・6頁＞

“ラ・サール生物部短報”として発行され，モンシロチョウのまとめが出ている。

〔第2号〕（1963年7月発行）＜ガリ版刷，袋とじ・6頁＞

上と同じ誌名でハ虫類の記あり，同時に第3号に相当する印刷物がでて，海葉の記録がある。

〔第4～6号〕発行されているはずだが，筆者はまだ見していない。

〔第7号〕（1966年2月7日発行）＜ガリ版刷，袋とじ・26頁＞

祖母山採集記（昆虫），羊歯植物採集記録（霧島山，紫尾山），淡水産プランクトンに関して，草蜚蟻飼育日記，迷蝶の記録，竜が水のヤクシマルリシジミについて

生徒たちがガリを切って作ったもので，昆虫の記録などはオリジナルでしっかりしている。なお，本会は中学部と高校部が合併しているらしい。

〔牛屎院〕（大口高校生物部）

〔創刊号〕（1964年3月31日発行）＜ガリ版刷・31頁＞

北薩の観光ならびに採集地案内，シダ類，タヌキの捕獲ならびに飼育記録，大口地方の昆虫採集目録，枕崎採集旅行の思い出，コシアカツバメの生息地，ほか。

〔第2号〕発行されているが，雑誌が手許にないので紹介できない。

地の利を得た学校で，多くの未調査地帯の生物相の採集が期待されたが，その後とだえてしまった。誌名は「ウシクソイン」とよむ。

〔かじのき〕（加治木高校生物研究部）

〔創刊号〕（1964年4月7日発行）＜タイプ印刷・39頁＞

気泡計算法，カエルの解剖，花粉の発芽，心臓の搏動，アミラーゼの消化，呼吸，ゾウリムシの走性，植物群落の測定，原形質分離と流動，血液型，蒸散作用など“実験書的”なものを主にして，黒川海岸のプランクトン，ツマグロヒョウモンの飼育，オオスカシバの飼育，霧島採集記などを含む。

〔第2号〕（1965年3月30日発行）＜タイプ印刷・38頁＞

始良郡地方のタカチホマイマイの研究，世界三番目の珍品シリプトゴマガイ辺田小島で採集，クロオオアリの生態，ほかは味覚反応，デンプンの消化，乳酸菌・大腸菌の培養，ダリア花びらの色素分離，ショウジョウバエの飼育など実験項目が多い。

〔第3号〕1966年に発行されているが筆者未見。

〔第4号〕（1967年3月発行）〈タイプ印刷・40頁〉

ヒドラの内部形態と再生，ミミズの走電性，チョウのさなぎ，空中細菌，ウサギの解剖，体色変化，筋肉と神経，血液型と血圧，ユスリカの唾腺染色体ほか。

〔第5号〕（1968年3月発行）〈タイプ印刷・26頁〉

アルコール発酵，オタマジャクシの尾の再生，クロモの光合成と呼吸，性染色体，味覚と遺伝，神経と筋肉，カエルのいろいろな細胞，走性，花粉母細胞ほか。

以上の通り，実験書的な内容の細かな原稿が多く，オリジナルな調査記録が少ないのが特徴である。その後は発行されていないと思われる。

「まのせ」（加世田高校生物部）

〔創刊号〕（1964年2月20日発行）〈タイプ印刷・46頁〉

セミの鳴く時間調査，タマスダレの開花について，ウキクサ群落の発達，タテハモドキの採集，ムラサキツバメの越冬，加世田市付近で採集したスズメガ類，南薩の植物方言，採集会報告（八瀬尾滝，長屋山，磯間山），ほかに花粉，無気呼吸，血液型と味盲，ミミズの再生，ショウジョウバエの飼育など。

〔第2号〕（1965年3月20日発行）〈タイプ印刷・76頁〉

ヒメウラナミジャノメの変異（第1報），校内植物群落調査，イネ科植物の花穂はどこから抜けるか，薩摩の植物方言，フタエオシロイバナの開花，ヒガンバナの花茎の伸長，トウモロコシに見られるキセニア，ヤツデとクローバーの変異，ムサシアブミの雌雄性，カクベンケイガニの再生，金峰町の迷蝶，片浦でツマベニチョウを目撃，野間岳山頂でメスアカムラサキとツマベニチョウを目撃，採集記（開聞岳，秋目海岸，野間岳，北海道，屋久島），文化祭の記録，磯間山維管束植物目録，ヒヨドリとあふちの話題ほか。

〔第3号〕（1966年2月23日発行）〈タイプ印刷・82頁〉

ヒメウラナミジャノメの変異（第2報），あふち（センダン）の生物学（冬芽，花，果実，葉の構造，葉の成長，あふちごよみ，残された問題点），新川海岸の生物群集調査，トウモロコシのキセニアによる分離，採集会報告（金峰山，久志，正円ノ池），文化祭の記録（ペークロ，血流，発光バクテリア，エビの体色変化，イースト，鱗粉転写），タツタカモクメシャチホコ，メスアカムラサキ，オリジなるな研究をすすめる，鹿大大学祭見学記，ヤッコソウ，生物ごよみ，ほか。

〔第4号〕（1967年）月日の記はないが5月15日受領〈タイプ印刷・34頁〉

野菜の煮えやすさについて，リンゴの変色について，ウキクサの寿命，生きている組織中にある酵素，メスアカムラサキの飛来，アオバセセリの造巢性，ネムノキに来るアゲハチョウ類，採集会報告（開聞岳，長屋山，野間半島），文化祭の記録（ユスリカの唾腺染色体，カエルの組織，ゴキブリ，筋収縮），自然のとびらは重い，ほか。

〔第5号〕（1968年3月23日発行）〈タイプ印刷・86頁〉

採集会報告（大浦，野間岳，枕崎～立神，秋目，久志～坊，笠沙路），ジャガイモの毒について，染色体，微生物，ネムノキにくるアゲハチョウ類，ニワトリの発生，南薩の迷蝶記録，竹田神社の

蝶類・シダ類，チョウ類の飼育記録（キマダラヒカゲ，ミカドアゲハ，ゴマダラチョウ，タテハモドキ），細菌に対する抗生物質の特異性，ほか。

〔第6号〕（1969年3月25日発行）〈タイプ印刷・80頁〉

採集会報告（大当，長屋山，塘池，久志～坊，秋目），金魚の呼吸，プラナリア再生，浸透作用，心臓灌流，犬の解剖，オジギソウ，蝶の飼育記録（ルリタテハ，アオバセセリ，ツマグロヒョウモンほか），俗説薩隅植物誌(1)，郷土史家故戸越佐太郎氏と植物。

〔第7号〕（1970年3月20日発行）〈タイプ印刷・85頁〉

ネムの木に来るアゲハチョウ類，ネムの木の花と果実，発光バクテリア，あぶちの木に着生する植物，ミヤマカラスアゲハの飼育，酵素（働きに影響する要因，トウモロコシの種子），脊髄反射，光合成，採集会報告（上津貫～大浦，八瀬尾滝，秋目，大隅），南薩の蝶類記録，俗説薩隅植物誌(2)，ツマベニチョウを求めて，ほか。

〔第8号〕（1971年3月31日発行）〈タイプ印刷・89頁+図版6枚〉

ネムノ木にくるアゲハチョウ，ホウキオオバコの種子の発芽と散布，ネムの木の落花と果実，ハナビシ草とヒナゲシ草の観察，ツルボの結実，山頂に集まる蝶類，1970年の南薩の蝶類記録，採集記（秋目，大浦～秋目，笹連），俗説薩隅植物誌(3)，薩摩半島南西部の植物化石について，校内樹木の種類，ほか。

〔第9号〕（1972年3月31日発行）〈タイプ印刷・74頁〉

加世田市周辺のクモ類記録，ツマベニチョウの記録，迷蝶記録，淡水微生物，校内の樹木，水にさした雑草の発根調べ，ヤマトキソウを磯間山で採集，採集会（秋目，金峰山，久志，蔵多山，錫山），俗説薩隅植物誌(4)，加世田市周辺地域に分布する岩石類。

〔第10号〕（1974年9月1日発行）〈タイプ印刷・52+9頁+7頁（ガリ）〉

ネムの木に来るアゲハチョウ（第5報），ツマベニチョウの飼育，1972年ネムの木の落花と結実数，ネムの木のサヤの大きさと種子数の変異，トウモロコシのキセニヤ観察，造巢性の蜘蛛について，ナタマメの葉成長観察，採集記（亀ヶ丘，八瀬尾，野間岳，禿どん山，金峰山，池底），野間岳の岩石類，加世田市周辺の地質構造について，俗説薩隅植物誌(5)，ほか。

県内の高校生物部誌としては初めて10号に達したが，その後は発行されていない。内容は変化に富み，植物とチョウの記録が多い。また，俗説薩隅植物誌（1～5）〈顧問教師による〉，ネムの木にくるアゲハチョウ類など，長期にわたる継続ものが目につく。

〔寒蘭〕（宮之城高校生物部）

〔創刊号〕（1965年発行・月日の記なし）〈タイプ印刷・61頁〉

ダイコンーホルモン，学校周辺の植物群落，紫尾山採集記，血液型の判定，紫尾山の植物相と植物群落（22頁分），紫尾山のシダ植物予報（18頁分）。

〔第2号〕（1968年3月25日発行）〈タイプ印刷・34頁〉

葉緑素の分析，佐多採集記，モウソウチク林の下草群落，日本シダの会紫尾山全国大会の記，宮之城高校周辺の地質について，紫尾登山。

〔第3号〕（1970年発行・月日の記なし）〈タイプ印刷・38頁〉

ペプシン、呼吸、光合成、骨格標本、ニワトリの発生、発光細菌、春化处理、宮之城の気候、紫尾山、宮之城の昆虫、關牟田池（採集記、ジュンサイ、プランクトン）、ほか。

宮之城～紫尾山一带の生物相とくに植物群落の調査が主なテーマのようであったが、その後は発行されていないらしい。いわゆる小さな実験項目のまとめより關牟田池などのオリジナルな調査記録が主になればいいと思う。

「BIOLOGY DATA」（鹿児島高校生物同好会）

〔創刊号〕（1965年6月発行）〈ガリ版刷袋とじ、17頁〉

蝶の採集・標本作製法のほか、鹿児島市周辺のチョウの記録でうずまっている。

〔第2号〕（1965年10月30日発行）〈ガリ版刷袋とじ、21頁〉

5月の栗野岳、春生ミカドアゲハの記録、カワトンボ褐色型と透明型の採集記録、ほかにも昆虫の記録が多い。グッピーの飼育法など。

〔第3号〕（1967年7月20日発行）〈ガリ版刷袋とじ、46頁〉

採集報告（湯之野、烏帽子岳、吉野）、校内樹木目録、蝶の冬の活動状況と初見日、ほかにチョウ記録が多い。

チョウ好きの生徒たちが中心になって発行した手作りの雑誌。市周辺の記録は開発が進んだ今日、かなり貴重なものとなった。その後は発行されていない。

「脈」（鹿屋高校生物部）

〔創刊号〕1965年「大隅の生物」として発行されたというが、未だ入手していない。

〔第2号〕（1967年3月発行）〈タイプ印刷、42頁〉

桜島の中ノ島生物相の調査、志布志町びろう島の陸産貝について（以上共同調査）、鹿屋市・高山町を中心とする平地の蝶と生態、ナガサキアゲハの飼育観察、BSCSの実験（アルコール発酵、コアセルベートの形成、酵素、吸水と浸透圧）、生物随筆、ほか。

〔第3号〕（1968年発行）〈タイプ印刷、42頁〉

知林島・小島の生物調査、蝶の観察記録、カジカガエルの生態について、迷鳥のイワミセキレイ、鹿屋の野鳥、呼吸の実験、みのむし、ほか。

共同調査の報告を主にして発行されたかなりレベルの高い雑誌であるが、第4号からあとは不明、発行されていない？

「甲南生物」（甲南高校生物部）

〔創刊号〕（1967年1月15日発行）〈タイプ印刷、31頁〉

トノサマガエルの心臓のはく動実験、空中細菌の研究、ジャガイモキンの検出、ジベレリンのはたらき、PTCひよる味覚実験、ハツカネズミの学習、鴨池海岸のプランクトン、ニワトリのふ化、ゾウリムシの走電性実験装置の工夫、ほか。

〔第2・3・4・号〕1968・69・70年に発行されているが、筆者未見。

〔第5号〕（1971年1月15日発行）〈タイプ印刷、51頁〉

佐多町ピロウ島の生物相について（植物・貝）、佐多のプランクトン、烏帽子岳採集会（植物）、動物標本の作り方、南西諸島の昆虫採集報告、触媒のはたらき、紫尾山遠行記、鹿児島県のプラナ

リアについて、ほか。

〔第6号〕（1972年2月20日）〈タイプ印刷，46頁〉

野間池採集記録（植物・ウニ・ナマコ・貝・蝶），千貫平採集会，日本に分布するカエルについて，生長運動，血球の観察，栗野岳のウスイロオナガシジミとミズイロオナガシジミについて，八重山採集会，八重山で目撃した蝶，球磨川上流のプラナリアについて。

生徒自身の力と指導者の助力とがバランスがとれた雑誌で，各地の採集調査記録を主によくまとまっている。しかし，これも7号以降の発行はきかない。

「しびっちょ」（出水高校生物部）

〔創刊号〕（1968年2月10日発行）〈タイプ印刷，68頁〉

出水地方の淡水産プランクトン調査，キリシマミドリシジミの成虫生態研究，出水・阿久根地方の海産プランクトン。

〔第2号〕（1969年3月20日発行）〈タイプ印刷，36頁〉

アブラボテの研究（第1報），鬼岳採集会報告，スギタニルリシジミ・テングチョウの調査，十曾池採集会報告，紫尾山・矢筈岳の蘚類報告，ヤマセミの生態，ほか。

〔第3号〕（1970年3月31日発行）〈タイプ印刷，36頁〉

アブラボテの研究（第2報），蝶類調査報告（大口市布計・4～6月，出水市樋之谷・6月），長島キャンプの報告。

〔第4号〕（1971年3月31日発行）〈タイプ印刷，40頁〉

アブラボテの研究（第3報），白髪岳の採集報告（第1報），味盲調査報告，紫尾山採集会報告，出水市樋之谷で採集したシダ類，出水市樋之谷の蝶相とその変遷。

〔第5号〕（1972年3月31日発行）〈タイプ印刷，40頁〉

下甌島生物調査の報告（蝶・セミ・トンボ・カメムシ・甲虫・植物），大関山採集報告，奥十曾採り歩記，ニワトリとアオダイショウの解剖。

〔第6号〕（1973年3月31日発行）〈タイプ印刷，66頁〉

紫尾山採集会報告，小白髪岳採集会報告（鳥・蝶・植物），水上村・煙草神社・湯川内・矢筈岳と白木川内・金峰山の蝶相，ウラナミシジミの越冬，植物表皮組織の研究。

〔第7号〕（1974年3月31日発行）〈タイプ印刷，32頁〉

採集会報告（上場→鬼岳，紫尾山，荒崎），性染色体の観察法，植物表皮組織の研究（第2報），ヘビの解剖，鱗粉転写。

野外でのオリジナルな調査記録を主にしたもので，第6号から7号にわたる植物表皮組織の研究のように全生徒の参加を企てたものを含む。

「桂木」（川辺高校生物クラブ）

〔創刊号〕（1968年3月26日発行）〈ガリ版袋とじ，15頁〉

葉緑素の粗抽出と分離，植物の無機栄養素の検出，魚の色素細胞の変化，鶏の胚の発生，生長ホルモンの濃度と反応性。

生徒の自作品であるが，背後に教師の適切な指導力がうかがわれる。しかし，その後は発行され

ていない。

「QUERCUS」(指宿高校生物部)

〔創刊号〕(1973年3月発行)〈タイプ印刷, 38頁〉

ツツジ科植物について、竹、サボテンについて、シダ植物、蛙の心臓かん流実験、指宿地区の蝶、学校周辺の植物、ほか。

地方色を生かした活躍が期待されたが、その後は発行されていない。

3 部誌の内容分析と批判

(1) 県外高校生物部誌の素描

鹿児島県下で発行された高校生物部誌の諸問題を論ずるにあたって、他の県の状況を知ることにも必要であるが、全国的に資料・部誌を集めて内容を検討することは個人の力では不可能である。ただ、私は迷チョウの採集記録やチョウの生活史関係の記録をひろいあげるために、できるだけ多くの雑誌に目を通すことに努めているので、生物関係の月刊雑誌や各県の昆虫同好会誌などから、いくらかは情報を得ているつもりではある。なかには、加世田高校や出水高校在職中にそれぞれの生物部誌との交換によって見ることができたものも多い。そこで、まず、現在手許にあるものを列挙してみる。

沖縄県：大自然(那覇高校・1970年に17号がでていいるから、現在は20号を越えているだろう)。ほかにも多少あったと思うが、この県の生物部の活動はすでに1959年生物教育会全国大会が行われた時点からきわめて盛んである。また、那覇高校生物部OB会から「このは会会報」も発行されている。

宮崎県：しだのこ(富島高校、'73年に8号)、YAMANE(小林高校)。また、小林高校OB会では「HINAMORI」「さこんたろう」(「ひなもり短報」改名)を発刊している。

福岡県：世物の世界(修猷館高校。'72年に29号が発行されているから、第二次大戦中かそれ以前に創刊されたものだろう。私は本誌以上に古い歴史をもつ部誌を知らない)、生物研究部誌(築上農高・'65年に4号)、生物部誌(小倉西高)、SEIBUTU(明善高校)

長崎県：染色体(長崎東高、'74年に22号)、遊走子(長崎西高校)、長崎南高等学校生物研究誌(同校)、Tsushmanus(対馬高校)、白蝶(五島高校)、これらの部誌には迷蝶の貴重な記録が多い。

九州の他の県については資料がえられないが、おそらく部誌発行があまり盛んでないものだろう。

本州では千差万別さまざまなものが発行されているが、「生物研究」(長野県上田高校)「生物甲陽」(兵庫県甲陽学院高校)、「卵高生物」(静岡高校)、「しろだも」(神奈川県小田原高校)、「ケプリ」(山口県光高校)、「ほうし」(新潟県新発田高校)、「MODOKI」(東京都立農芸高校)、「Blakiston」(青森県弘前高校)などを見ることができた。

(2) 生物部誌発行のきっかけ

一般に生物部の活動は部誌のない形でまず進行し、やがて部誌発行の気運が生ずるものであるが、そのきっかけ、原動力は何だろうか。本県の場合、それは次の二型に分けられるように思う。

A) 教師の指導力が大きいもの、つまり、教師がいなかったらおそらく発行されなかったと思われるもの。大部分の部誌がこの型に属する。もちろん教師の指導にも程度の差があって、事務的な手助

けをしたに過ぎないものから、ほとんど教師ひとりで作りあげたようなものまでであるが、いったん創刊された後は生徒の力で発行が進んでいる例が多い。

B) 生徒の力によるもの。学校で発行されるわけだから教師の助力がないというのはおかしいことで、これは、少なくとも表面的には生徒たちのエネルギーが強くあらわれていて、教師は暖かく見守って影の力になっているという意味である。「あこう」(鶴丸)「生物部誌」(ラ・サール)、「モンシロチョウ」(志布志)、「BIOLOGY DATA」(鹿児島)がこの例に入る。

それでは、何が教師や生徒たちを部誌の創刊へかり立てたかという、当然のことながら「発表すること」に何らかの意義や価値を見出したからなのだが、それは、

a) 生物学上の新知見または貴重な知見だと信ずる記録が手許にあるからどうしても公表したい。

b) クラブ活動の楽しさを何らかの形で示し、それを残しておきたい。

の二点に要約できる。

これらはいずれも重要なもので、後で改めて検討するが、ここで上記B-a型ともいえる部誌に昆虫の記事が多く、鹿児島昆虫同好会の学生会員たちが主になっていることを指摘したい。やや我田引水になるが、これはおそらく、昆虫同好会のモットーである。記録はきちんと報告するものだ — 印刷物にして残しておかねばならぬ — 印刷物(雑誌)の発行は簡単なものだ — とする。ある種の習慣や安易感みたいなものが、若い会員の中に定着しているからであろう。いわば同好会誌「SATSUMA」が見本になっていると考えてよい。

このように部誌の創刊には、「この位なら自分たちにも出来そうだ」という見本の存在が大きい、鹿児島県下でそれに類するものを見ようとすれば、月刊雑誌「採集と飼育」「遺伝」「科学の実験」などのほか、昆虫同好会誌「SATSUMA」(年3~4回発行で現在71号)があるくらいのもので、「鹿児島植物同好会報」(年1回発行、現在3号)、県理協の「理科部会誌」(年1回、教職員用)は生徒の目にふれにくいし、戦前に活動し、戦後2号まで発行された「鹿児島博物学会報」はその中心的な役割を期待されながらも今や追憶のなかに消え去った。

とすれば、案外、ほかの高校の生物部誌が参考にされ、引き金になっているのかもしれない。前述の1960年代の最盛期の原因もこの種の連鎖反応だったのだろうか。

(3) 生物部誌の内容分析と批判

まず本県生物部誌で扱われている生物群の検討をしたいが、各雑誌から生物名をひろい出し、その出現ひん度や頁数を調べるような本格的な仕事は今の私にはできそうもないから、おおざっぱなまとめを記してみる。

[植物]

細菌植物：発光細菌が最も多く、空中細菌、枯草菌などが少数。

緑虫・ケイソウ・ウズベン毛ソウ・緑ソウ植物：ミドリムシ、アオミドロのほかは、プランクトンとしてまとめられる。

真菌植物：コウボ菌が圧倒的に多く、キノコの記録はまれ。

コケ植物・シダ植物・種子植物：採集会など野外活動の目録として多い。

〔動物〕

原生動物：ゾウリムシ，他は“微生物”としてツリガネムシなどが散見される。

扁形動物：プラナリア（分布，再生実験）

輪形動物：ワムシ類が“微生物”として扱われる。

環形動物：ミミズ（再生，解剖）。ヒルやゴカイはほとんど出ていない。

軟体動物：貝類の採集目録，ハマグリ解剖，イカの解剖など。

節足動物：甲かく類（ミジンコ，エビの体色変化，カニの再生など）；多足類（目録）；クモ類（目録）；昆虫類（チョウが圧倒的に多く，大型甲虫，トンボなどが少数）

棘皮動物：ナマコ（解剖）。ウニ（発生）はあまり出ていない。

脊椎動物：魚類（アブラボテの分布・生活史，メダカ），両生類（カエルの筋肉や心臓の実験），ハ虫類（ヘビの解剖），鳥類（目録，ニワトリの発生），哺乳類（ウサギの解剖）

このように，著しいかたよりが見られるのは主に次のような理由であろう。

ア) 教科書や実験書に出ている。 イ) 入手しやすい。 ウ) 同定しやすい。

しかし，身近かに普通にいる生物でありながらほとんどとりあげられていない種やグループが多いことはおもしろい事実で（例。根粒細菌，ナットウ菌，ランソウ菌，キノコ類，メイシバ・スベリヒユなどの雑草類，クラゲ，タコ，ゴキブリ，ドブネズミなど），これらは今後“開発”する余地を残している。また，同定しやすい生物といっても，図鑑で判定できる種は限られているから，種名まで正しく同定されている例は少ないとみるべきだろう。

これらの生物がどのような扱われ方をしているかに着目すれば，部誌の内容は次の三つのタイプになる。

1) 実験書的内容：教科書や実験書に出ている項目を指示通りに行き，うまくいったとか失敗したとかいう記録。概して，その後さらに問題を追求した発展的な内容を欠くのが共通している。この種の実験はレポートを作り，それによる指導がなされることは必要だが，わざわざ印刷にするほどのことはないと思う。ただ，新しい方法や材料を発見したような場合とか，生徒の自発性を尊重して次への前進を期待するような場合，部誌の一部の頁をさくことは良いだろう。しかし，この型を主内容にした部誌は長続きしないようだ。

2) 調査報告書的内容：学校周辺の，あるいはかなりの遠隔地の採集調査記録として最もよく見られもので，私は部誌の中心となるべき内容と考えるが，オリジナルな記録として利用する立場からみると，記録や報告のし方に甘いものが多い。たとえば，種の同定は実にむづかしいものだが，同定者が明記されておらず，標本の所在地や個体数なども不明のままになっている。年月日・場所・方法すら書き落していたり，引用文献も少ない。

3) 文集的内容：採集記というより遠足記，ほかの書物からぬきだしたレポート，思い出の記，生物随想の類で，部活動の“楽しみ”の要素を強く出したもの。これは頁数すなわち印刷費予算に余裕があれば，多少はあってもよいだろうが，たいていは自作のガリ版印刷で間に合いそうなもので，これを主にすれば，部誌は科学誌としての性格を失う。

4 高校生物部誌のゆくえ

これからの人類にとって、今や巨大でえたいの知れないものとなった自然科学の正体をしっかり把握しておくことが、もし本当に必要なら、高校における理科教育もそれに一役かわねばなるまいが、正直に言って、教科書・参考書・テレビ・実験などをいかに駆使しても、目的を達することは不可能に近いと感ずる。それは多くが「解説されるもの」だからであろう。今や、自然科学というものはその中にどっぷりつかり込んだ者でなければ理解し難い面を強く持ちだしたような気がする。

ただし、道がひとつだけ残されている。それは生物科学の建設に参加するということである。これは別に生物学の研究者を養成しようというものではない。一生のうち1回くらいは、解説を読むだけでなく自から手をそめてみたらどうか、ということだ。

自然科学の建設に参加するということは、自然現象に科学の立場から直接タッチし、新知見を見出し、記録し、報告することである。これらに基づいて新しい理論を構成するところまでは必ずしも行かなくてよい。一歩だけ足をふみ入れるだけで、かなり先まで見えてくるものだから。

高校生がやれそうな新しい分野はもはや無いという人もいる。たしかにそういう見方もできようが、私はいつも、世の中のすべてが時間と共に次々と変化していくものと認識しているので、調べてみたい問題が多すぎて困る。学校近くのドブ川を眺めても、桜島の灰を身に浴びても、自動車の騒音を聞いても、廊下で足を滑らせながらも、これらはいったいどうなっているんだとつい調べてみたい気になってしまう。生物の世界では特にそれが多く、そして調べやすい。だから、物理部や化学部などより生物部誌の発行例が多いのだろう。参加するとは記録を発表することである。

私自身は、加世田高校で「まのせ」の創刊に力を貸した時、前記三要素の調和をはかって、きびしさと楽しさの同居した総合雑誌的なものにした。これはこれで、この学校の気質に合っていてよかったと思う。後に出水高校に移って「しびっちょ」を出した時には、前任者の好指導で地力がついていたこともあって、オリジナルな記録に徹した雑誌にさせた。その創刊号の巻頭言で私がのべたことは、今でもそのまま私の気持をあらわしている。

曰く「……逆に、狭く深い知識をえることは非常にむづかしいし、同じことばかりやっているという不安感に悩まされて、なかなか人がやりたがらないことである。生物学の分野でも、ある事象を深く調べようとすれば、たちまち思いもよらない困難点におちあたる。

あたかも広く浅い知識が平坦な道を歩いていくようなものだとするれば、狭く深い知識は山に登るようなものである。平坦地2kmの道は子供でも歩けるが、2000mの山頂への道はきびしい。見聞をひろめるために平らな道を歩くのもよい。しかし、人生にとって山頂から広く景色を眺めるのもまた大切なことである。知識が深ければ深いほど眺望は雄大となる。

私が新しいこの部誌に期待するものは、この狭く深い知識の追求である。多くの高校の生物部誌にあるような「軽い読みもの」は思いきって削除されるがよい。きびしい探求の結果だけをのせるきりりとひきしまった会誌にしてほしい。高校生物部誌の新しいタイプを創造してほしい。さいわい、この創刊号が私の期待にそっていることをうれしく思う」

これもまた、出水兵児の気質にマッチしていたはずである。

そして、「まのせ」でも「しびっちょ」でも、一年生の全員参加による調査記録，前者では“セミのなく時間調査”，後者では“植物表皮組織の研究”を，部誌に印刷物として残した。実は，この試みをもっと充実させ，生物部誌のさらに新しい型を作り出すのが，私のささやかな夢のひとつである。それが鹿児島中央高校で可能だろうか。

高校で生物部誌を発行するにあたって，上記のような内容の問題を除くと，おそらく次のような事が，問題となろうが，その打策も一応は考えてみた。

1) 生徒の活動時間の不足。どこの普通高校でもあまりまとまった時間はとれないから，毎日少しずつ継続的に調べるようなテーマを設定することが必要である。

2) 生物部OBの参加。大学生であれ社会人であれ大歓迎である。採集会や遠征時には偉大な力を発揮する。むしろ，OBを含めた会誌にすることがのぞましい。

3) 発行資金の不足。無駄な文章，とくに文集的なものを排除して頁数をへらす一方，オフセット印刷の技術を活用して，黒インク手書きの原稿によるページをふやす。学会の講演要員などの作製時に使っている方法である。

4) サーキュレーションの悪さをどうするか。せっかく発行しても読んでくれる人が少なくは何にもならない。あちこちのお偉方に記念品みたいに進呈するのは後まわしにして，せめて各クラスに1冊ずつは配布して生徒たちに読ませること。次に，とりあげられたテーマに専門的知識と関心を持つ大学の研究者，他の高校の生物部員・教師，そして永久保存のために学校図書館のほか，県立図書館くらいに送付する。県外との交流もできるだけ多い方がよい。高校生の貧弱な研究物をそこまでしなくても — と思われるかも知れないが，これは最も重要なことである。少しきびしくいえば，このような扱い方をされるような内容の部誌でなければ発行しない方がましであり，高校生にとってこれは決して不可能なことではない。また，各県でこの種の雑誌を保存集収するセンターをぜひ作ってほしいと思う。





